

## 34. 近世以降における農民服飾に関する研究

### (第2報)

#### 被服材料(衣料・染織)よりみた農民服飾

和洋女子大 遠藤 武

○鷹司 綸子

1. 封建社会における農村は藩の財政の供給源としてきびしい誅求にあい、数々の禁令のもとで苦しい生活が続けられて来た。平常着、晴着、すべてこれ仕事着で代行され、小面積でのほげしい肉体労働は、必然的にそれに耐え得る強靱で堅牢な衣料を欲求した。代々継承し来た生活の智恵はその環境から使用可能のあらゆるものを撰出し、彼等独自のいわば農民文化とも名付くべき衣生活を展開し来た。しかし明治維新や世界大戦を契機とし、西欧文明の流入・政治機構の変化・交通の発達等は日本文化の様相を大きく変じ、大量生産された新繊維・新染料は、急速に農村から天然繊維・染料を駆逐し、遂にその保存には特別な保護を要するまでに至ったのである。かく消えゆく庶民文化の往古の姿を記録に止むべき急務をおもい、今年度はその第2報として被服材料(衣料原料・染織)の問題をとりあげた。

2. 本研究には例年本学服装史研究室で行っている「農山漁村労働着調査」より昭和28年度より現在に至る調査報告並びに各地方町村史を主な資料としてとりあげた。

3. すでに機械文明の陰に沈みかけている農民生活をとどめ、便利、安価等表面の利ではなく、無駄のない所有ものを限られたわくの中で工夫利用し生かした生活の様相、無名の先人の偉大な生活文化遺産を衣生活の一端に再認識した。